



(玄関)

日産館新築工事

所在地 東京市芝區田村町壹丁目貳番地
敷地面積 1,259.636坪(東西約66間、南北17間)
建築面積 1,091.226坪
總延坪 8,146.752坪
内譯
地階 1,206.461坪
一階 1,091.226坪

ンルーム

屋階一屋上階・各機械室
構造

基礎・は地盤面より地下18.5尺迄總掘鑿をし地底より長65.0尺、末口径10時の米松杭を打込み捨コンクリート、上端にシーカ防水層を施し鐵筋コンクリート版地形を設く。

二階 1,072.350坪
三階 1,072.350坪
四階 1,072.350坪
五階 1,001.371坪
六階 874.927坪
七階 511.608坪
八階 170.566坪
屋階 53.388坪
屋上 20.200坪

建物高

正面軒高 102.200尺
正面塔屋軒高 120.677尺
南側軒高 55.800尺
北側軒高 70.075尺

建築様式 近世式

各階配置

地階・機械室、電氣室、煖房室、ポンプ室、汚水淨化装置室、塵埃燒却爐室、石炭室、倉庫荷解荷造室、物置、下足室、宿直室、湯沸室、浴室

一階・廣間、事務室、金庫室、自動車庫及運轉手控室、自動車駐車場、湯沸室、便所

二階一六階・廣間、事務室、金庫室、湯沸室、便所

七階・廣間、講堂、一般食堂、重役食堂、來客食堂、厨房室、配膳室

八階・廣間、事務室、フア

上部構造は全部鉄骨鉄筋コンクリートとす

外 装

各面軒迄稻田産花崗石貼り南北面の後退部分は花崗石擬石ブロック貼り

内 装

床・玄関は研磨せる花崗石、廊下はテラゾー、事務室はリノリウム敷き、便所はタイル貼り

壁面・玄関及廊下腰共大理石其の他一般漆喰塗り

建 具

玄関ホール出入口扉は鋼鉄製にしてホワイトブロンズ鍍金せるもの其の他各出入口扉は鋼鉄製ペンキ塗り、各窓は全部上下式スチールサツシュを用ふ、

メールシユート

各階第一廣間に郵便物投入口を設け壹階に郵便箱を置く

附帯設備

暖房装置・地階に汽罐を設置し之れより鐵管を以て各室に設置の放熱器に送氣す

換氣装置・各階便所、地階、倉庫、各階事務室、食堂、ホールに装置をなし之が排氣器は地下室に設置す

給氣装置・七階講堂及重役食堂及來客食堂には新鮮なる空氣を取り入れ冬季に於てはヒーターに依り溫氣を給す

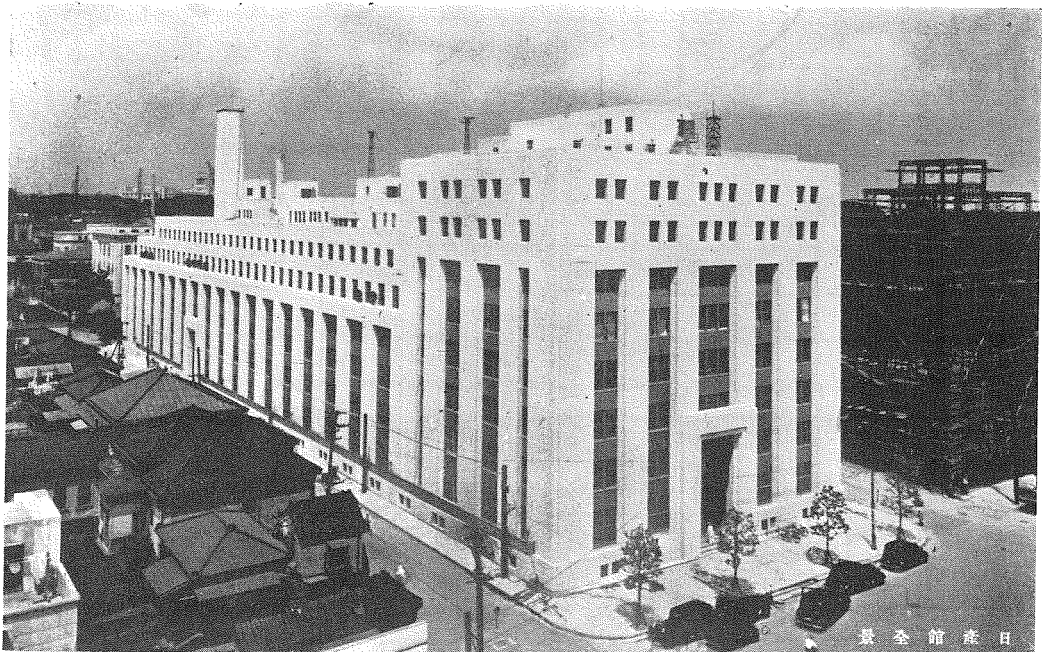
給湯装置・地階にボイラーを設置し溫水貯藏槽より各手洗器及湯沸場厨房配膳室に給湯す、尙飲料用としては各階湯沸場に瓦斯湯沸器を設置す

給排水装置・便所は總て水洗式にして地階に揚水ポンプを設置し深井戸二ヶ所より屋階タンクに揚水をなし之より各手洗所其の他衛生器具に給水す

但し飲用水は市より供給を受く

雨水及一階以上各階器具よりの排水は直

(全 景)



接市設下水道に放流し、地階の衛生其の
他汚水はポンプに依り押し上げ下水道に放
流す。

消火設備・各階要所に消火栓を設け屋外に
は消防用ホース連結口を設け非常の場合
外部より送水し得る装置とす

電気設備・電燈並に動力に使用する電流は
市電並に東電より高圧供給を受け地階配
電盤を通じ各所に配電す

火災に備へる爲各階適所に自動スモッチ
を設け各所へ報知す

避雷針・塔屋上端及煙突上部口に配置し接
地板は地下防水施工以前に埋没す
瓦斯設置・各階洗場の湯沸器、配膳室及臺
所の器具に配管す

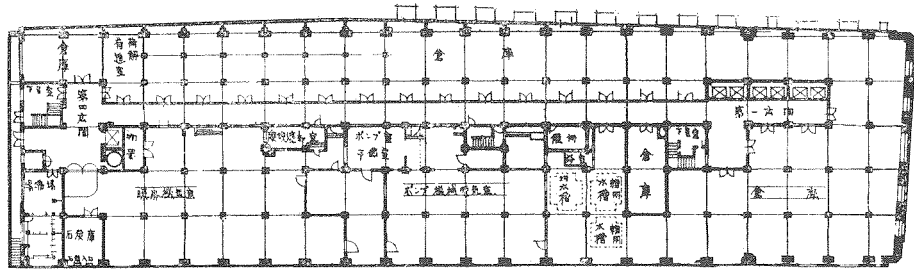
昇降機・日立製作所製客用エレベーター計
6臺を設備す

他に貨物専用エレベーター1臺

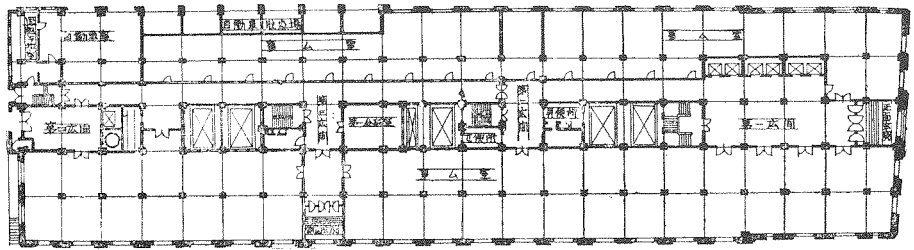
起 工 昭和九年十一月十四日
地鎮祭

竣 工 昭和十二年七月十五日
設計並施工 中央土木株式會社。

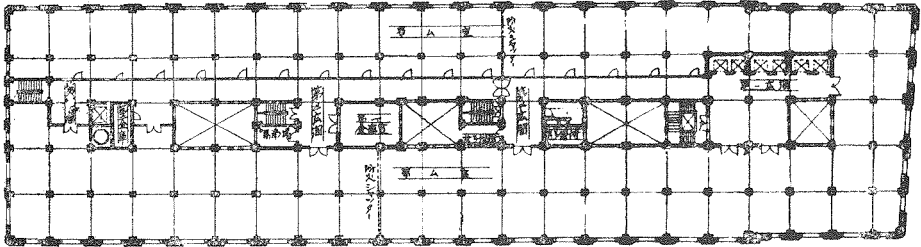
平面圖



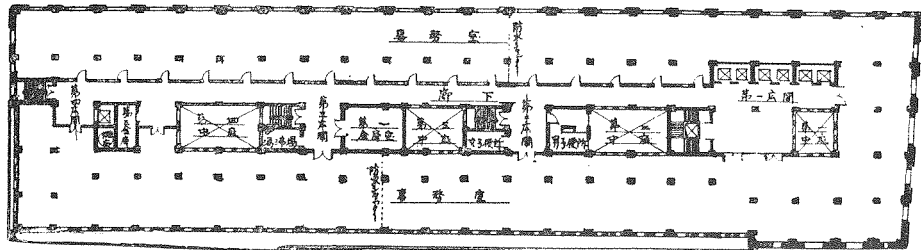
地階



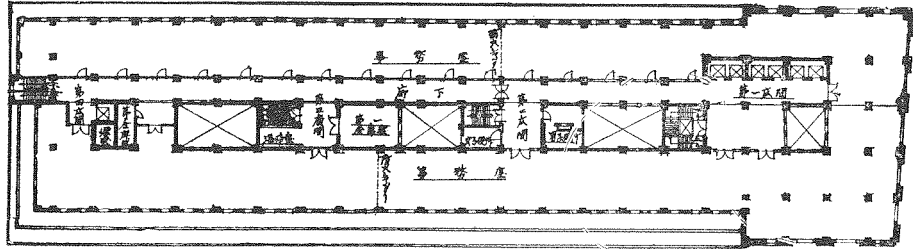
1階



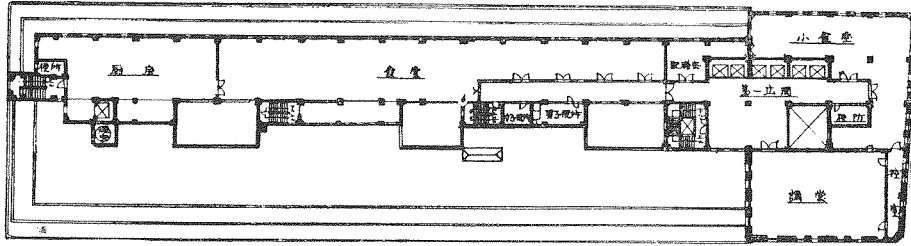
2,3,4階



5階



6階



7階

都市鐵道工學

大阪市高速鐵道部長 橋本敬之氏著

本書の著者橋本敬之氏は曾て鐵道省建設局工事課長たりし時に現場工事の業績に關する各種の報告書を發表して、我國工事技術界に革新的な刺戟を與へられた先覺者の一人である。都市鐵道工學は橋本氏が大阪市の地下鐵道建工事を擔當するに至つて數年間の成果を爰に發表されたものと見られる。鐵道省の新線建設工事は山間の地方が多く施工方法も單純な場合が多いのであるが、都市内の新線建設工事はそれと大に異り、設計にも施工にも非常な複雑性があり技術的にも事務的にも多大のトラブルを作ふものである。それだけ面倒な問題であるだけに從來此種の系統的に纏つた著書がなかつた。

然し近代日本の都市の膨脹發展は素晴らしい勢であるから、都市鐵道なる者が將來益々重要となり工事施工の方法も益々科學的たるを要するに至るは當然の事である。著者が爰に都市鐵道工學の標準的な指針を與へられた事は、參考書として唯一のものたるのみならず、都市鐵道將來の爲に大なる

寄與をなすものである。編纂の態度は世界各國の都市鐵道を參照し國內多數の經驗と著者の豊富なる科學的施工の實例とを加へ、明快なる判斷と解説を與へ、特に第8章地下鐵道の施工方法の如き50頁餘に達する實際的記述は最も價值あるもので、一般工事技術家及都市のビルディング工事關係者等にも有益なる參考資料である。

内容は第1編高速鐵道に就て、總説、計畫、線路設計、地下鐵道構築の設計、高架構築の設計、停車場、軌道、地下鐵道の施工方法、防水工事と排水設備、高速鐵道の電氣設備、換氣設備、騒音設備、空襲と地下鐵道、車輛及び車庫。

第2編路面電車軌道に於て、總説、計畫、軌道轉轍器及び轍叉、電車線路、信號と聯動の各項を細説して菊判412頁外に附圖挿圖等も適當に加へられた。(アルス土木工學大講座第10、アルス發行豫約價2圓50錢)